

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 22 回

福岡表警聞懐旧談 (一四)

野芥・金武での軍・警察との戦闘に敗れ、曲淵・三瀬へと脊振山の山中深く、福岡士族の敗走が始まった。当初、佐賀へと抜ける予定だったが、佐賀士族がこれをささげざる。背景には、明治七年の佐賀の乱の際、福岡士族が官軍の募兵に依り、江藤新平らの制圧に向かったことに、佐賀士族が反発したことがあると云われるが(連載第十回参照)、ここではそのことにふれていない。

越知彦四郎らの一隊は突然、鳥栖地方にあらわれ、轟警察署を襲撃する。そこに至るまでに現在の那珂川町や筑紫野市を通過しているはずだが、詳しいルートはわかっていない。ここから二隊に分かれて秋月をめざす。それは破滅への道なのだが、一行はまだ待ちかまえている運命に気付いていない。(筆者江島茂逸の文章は、漢字の使い方に独特の癖がある。今回は特に読みにくいがほぼ原文のままにしている)

叫びて其場に斃れたる、言語同(道)断、无慮突迷之変事を起す。一座は狼狽顛蹶、為す所を知らざりけり。彼三好は二の太刀振り上げ、その吉村兎一郎を目がけて研付けんせしめ、吉村は側なる小銃もて受流して其身を脱す。

傍に在る中野・山崎・市川等は各抜刀して防ぎ戦ふ。そのはづみに市川は頭顱に負傷し、山崎も亦左の臂に微傷を負ふ。三好は逐はれて戸外に出ても尚も搏闘なせしが、後の小溝に蹶倒して後に倒る。市川は附入りて三好が額に一刀研付たり。彼は起き上り鮮血淋漓、血眈を烈せ、畦畔に仁王立して何言かつぶやき居たり。

福岡表警聞懐旧談 下

第九回

飯場村の小集。三好徳藏放心して今村平四郎を討つ

偕て爰に金武地方に引上げたる隊士の一累は、山間溪路を跋渉して、辛ふじて飯場村迄来り、是より曲淵の本部に赴かんとし、その連類の内、中野震太郎、その弟山崎浩三・吉村兎一郎・今村平四郎・市川喜八郎は、途中、塩・猪肉一□と鶏數羽を購求し、飯場村の一農家に入り、之を料理し、濁酒を酌んで疲勞を医さんとする一利那、其同隊なる三好徳藏、突然戸外より抜刀して入り来り、柱に凭り爐を囲みて燵を取り居たる今村平四郎目がけて、肩先深く研り付る。

そのヒルムに乗じ、横腹を刺し通す。剛毅の今村も不意を討たれ、吁々と一声

しにはあらざりしかと云ひ合へり。

第十回

○早良郡曲淵村本部の衆議。本部を佐賀県三つ瀬に徙し、佐賀兵との聯合を策せるも、旧約抵牾し、羊腸嶮岨を跋渉して肥前之国基肆(肆)郡田代に出で、官軍之背後を衝かんとす

斯くて翌二十九日に及び、味方は早良郡曲淵村に本部を移し、その地方に退却して後図を営みつ、ありしが、その日昼頃より官兵雲霞の如く、三方の谿路より押寄せ来り、隠見出沒、乱砲なしたり。

此騒に近傍の農家にありたる舌間慎吾・宗夢也・藤勝頭・野村祐亮其他の数名も馳せ付け来る。宗夢也は、野村か持てる二枚込の銃を取り狙射せしに、彼は眉間を打ぬかれ後に堂と倒る。市川喜八郎は返報返しの気取なし、彼が捨てたる血刀もてその首級を刎たり。

抑も三好なるものは、何の遺恨、何の宿愿ありて斯かる暴状を働かしぞ。何れ當日戦地に於て、一累より何か激論せしことあり。且や味方敢果なく潰敗せしを憤懣して放心し、爰に及び



越知らの一隊が襲撃した警察署は日子神社(写真奥の鳥居)前にあった=現、鳥栖市轟木町=

此日朝来より天色陰霾雲(ばいしよう)雪々として寒氷凜烈、肌を殺きたり。隊士は決死協同なして、要衝の各路に於て激戦勇闘數回に及び、日暮に及んで交綏す。然れども宿陣すべき個所もなければ、又糧餉の手当も欠き、到底此地に於て防戦すること能はざりしかば、大隊長越知は令して各地の散兵を集纏して、是より本部を佐賀県三つ瀬宿に移し、同県の有志と聯合して再挙を図らんと欲す。

是より先三月廿二三日の頃、副官久光忍太郎は八木和一・船越聞道を同伴して、即ち肥前ノ国三つ瀬宿に至り、同県有志の士族岡本甚四郎列へ會合して、秘密の談話を交へ、兎角に、今日に至りては先年の怨みを積て聯絡し、且つ時宜によりては道を借らんことを要約して、還りしことありしかば、越知はその内約を踏みて、全隊に先ち八木和一・船越聞道をして三つ瀬に赴きて、其ことを協調せしめけり。

折柄大雪吹いて氷霰凛々。曲淵を發陣、その間五里の里程の嶮岨溪澗を夜路に辿り、途次に凍疲せしもの数名に及ぶ。辛ふじて翌三十日の天明の比、三瀬宿に着せしなり。

然るに佐賀士族に於ても、その当時は有志者の団結成り、密々兵備も調整せし由なりしも、彼の田原坂の要衝陥落より全く方向変換し、今日に於ては肥前聯絡どころか、我々味方へ道を仮すことだにも、返つて忌諱するの内実に打交じ、彼有志士族は一人の影だも見へず。

返つて警吏らしき人数が境塚を取締りて、我が味方の勢を防禦せんとする形勢なりしかば、越知も頓と案外なして、それより路を転じて肥前基肆郡田代・轟宿地方に出で、直ちに久留米地方へ進軍して、官軍の背脊を襲はんとするの方已みなく、絶対的の危道を踏むに至りけり。

偕て隊士列は、昨夜々徹

ふし冽水中に五里の嶮路を跋渉し、身体の疲勞憔悴は言ふまでもなく、三つ瀬宿に於て僅かに糧餉を遣ひ、勇を鼓し、氣を励まして、それより三三五々分散し、又々八九里に余る羊腸絶壁の山路を、夜行に凌歴せしことなれば、大半は途次に散乱なせしも、決死の一累は辛ふじて翌三十一日昼時分に、脊振山の腰麓を迂回し、轟宿の近傍に出ることを得。

第一着に轟の警察署を襲ひしが、署員は已に分散して敢て抗敵するものなかりしかば、一列は轟宿に於て糧餉を遣ひ、暫時らく宿内の人家に入りて休憩しつゝ、それより中原宿を経て、徐々として田代に向ひ進行す。同宿に於て衆議の結果、到底兵疲れ糧乏し。是より久留米へ向け進軍するの勇氣もなければとて、此上は方位を転じ、旧秋月城に拠りて以て氣を養ひ、充分の方略を講じて以て後図をなす可きことは変更す。

依つて一列を中分して前後の二隊とし、前鋒隊は四三島を経て馬市に出で、以て秋月に向ひ、後軍は松崎宿の裏手を迂回し、阿弥陀ヶ峯の本街道に出で、以て秋月城に向ふ可きに楪合なして、其夜は田代地方に一泊せしなり。

依つて一列を中分して前後の二隊とし、前鋒隊は四三島を経て馬市に出で、以て秋月に向ひ、後軍は松崎宿の裏手を迂回し、阿弥陀ヶ峯の本街道に出で、以て秋月城に向ふ可きに楪合なして、其夜は田代地方に一泊せしなり。